

かあちゃん床屋に春がきた



角田雄喜

角田深雪



新声社

かあちゃん床屋に春がきた

角田雄喜 角田深雪

かあちゃん床屋に春がきた 定価一、〇〇〇円

一九八三年一月六日 初版発行

著者 角田雄喜（つのだゆうき）

角田深雪（つのだみゆき）

発行人 加藤 博

発行所 新声社 〒一〇一 東京都千代田区内神田一―一五―一五 柴田ビル

電話 〇三（二九三）九三二一〜四

振替 東京五―九八四二〇 印刷所 壮光社印刷 東京アート印刷

万一落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。（分）〇〇三六（製）〇一九四一〇（出）三三三六

かあちゃん床屋に春がきた

装幀 .. 荒川じんぺい
装画 .. えびなみつる

かあちゃん床屋に春がきた

目次

はじめに

6

北風に向かつて歩く

9

—角田雄喜の生い立ちと青春—

いつも明日があつた

47

—角田深雪の多感時代—

結婚そしてふたりの記録

—父となり母となり—

疎開地に肩寄せ合つて

139

―春のぞむ冬の季節―

かあちゃん床屋に春がきた

185

―息子の青春 娘の幸せ―

喜びも悲しみも

235

―共に生きた日々よ―

あとがきにかえて

265

はじめに

つのだじろう（漫画家）

この本、実は私の両親が喜寿を記念し、子供たちへの遺言のつもりで自費出版した自伝『墓のめし』が原本になっている。それがラジオ短波放送にドキュメンタリー・ドラマとして構成、放送され、82年度の民放祭コンテストに出品された。これがなんと教養部門で最優秀賞の栄冠に輝いてしまったのである。

そのいきさつが週刊文春の記事になり、こうして出版に結びついたわけなのだ。

無学なガンコ親父と床屋のかあちゃん、あいだに生まれたガキ八人。それがみんな奇妙な連中で、カメラマンあり、ドラマーあり、理容師の全日本チャンピオン、リ्यूート奏者、そして漫画家あり……と、まあにぎやかなこと！

ついでにみんなを紹介してみる。

長兄 喜代一・フリー・カメラマン

長女 明子・理容師・主婦・号冷泉（書道）

次女 恵子・理容師・主婦・号幽辺（書道）

次男 次朗・漫画家（つのだじろう）・号照月迂人（書道）

三男 征三郎・理容講師・全日本チャンピオン・詩吟師範

三女 弥栄・書道教師・主婦・号白琇（書道）

四男 隆・音楽家（リュート奏者）西ドイツ国立ケルン音大卒業

五男 博民・作詞・作曲家・ドラマー（つのだ★ひろ）

こんな家族のどこに教養部門の最優秀賞なんかに価する価値があるんだろう？

私にはよくわからない。もしあるとするなら、きっとそれは赤貧の中から七十有余年、それこそ裸一貫で奇妙な八人のガキを育て切った両親の人生の苦闘そのものにあたえられたのではなからうか。公平にみてこれは「人間が生きる」ということは何なのか」を考えさせられる、ひとつの貴重な生きざまの記録ではある。そのようにも考えられるからだ。いずれにしろ、それは私たち子供の決めることではない。この本を読んでいただいたみなさんに決めていただくことだと思う。

確かに、生きるといふことはきびしいものである。長い人生のうちには運不運がある。

どうしようもなく落ち込んでしまうこともあるだろう。しかし、どのようなことがあつても、あきらめないで欲しい。頑張るべきだ。永遠のように思える冬の季節も、いつかは春にとつてかわられる。希望だけは絶対失つてはならない。努力を忘れてはならない。

合計百五十歳を越す私たち夫婦が必死に生きてきて学んだことである。

この体験を通して学んだことを、子供たちに、自分たちのたどってきた道を本という形で書き残し、伝えたいと思つた。いわば、親たちの遺書のつもりである。

しかし、縁あつて多くの方々の目にふれる幸運を得た。八人の子供のみに伝えるというような本ではなくなつた。それに、考えてみれば、私たちもまだまだ元気である。若いこむのは早すぎると思ひ直した。

この本は遺書ではなく、みなさんへの激励の書だと思つていただきたい。

——小学校さえ満足にでないあの二人でさえ頑張り抜いたではないか。

そう思つていただいて、少々のことでもこたれたら恰好悪い、なんとしてでも頑張るぞということ、たった一度の人生を充実させ、まっとうしていただきたいのである。

角田雄喜

深雪

北風に向かつて歩く

―角田雄喜の生い立ちと青春―

やけど

私は、福島県東白川郡社川^{やしろがわ}村字逆川、父、秦^{しん} 徳次郎、母 よし、の次男として明治三十六年十月四日に生まれた。

家は小さかったが、田畑山林は多少あり、父は行商、母は畑作りなどして細ぼそと生計を立てていた。

ある朝、突然私の運命を左右するほどの事故が起きた。

その日も母ははやばやと飯をたき、生後半年の私を切り炬燵^{ごたつ}に寝かせ、父の弁当の用意などをしていた。

突然の火のつくような泣き声に驚いて来てみると、私が自分で寝がえりをしたりあとうずさりをしたあげく、炬燵の中の真つ赤におこった炭火に両足をを入れてしまい、その熱さにもがきながら、火をかき回していたそうだ。急いで炭火の中から引き上げたが、幼い足の指先、特に右足の親指はすでに短く燃え、次の指はよじれ、あとの指は内側に曲がついた。十指のうち無事だったのは二本きり。

母は横抱きにして棚倉町の医者へ駆け、二回ほど手当してもらい、あとは人の話で、

やけどには新しい馬糞の汁で湿布するのが一番良いとか、およそ、よいといわれたことなら何でも試みたそうだ。その当時はそうそう医者にかかれるものではなく、衛生観念も発達していなかったから、今、考えると全く恐ろしい。

昔からやけどをさせると親の恩が無くなる、との言い伝えがあるが、その後、折にふれ母はボロボロ涙を流して詫びの言葉を繰り返すのみであった。

やけどのあとをそのまま残し固まってしまった足ながら、私は元気に育った。ひとりで歩くようになり、四、五歳までは恥ずかしいということも分からないから、やけどの足をかくすこともしないで、平気で遊んでいた。

そんな私が明治四十三年四月、一年生に入学した。大勢の同級生や上級生は、私の回りに集まり珍しそうに足を見て、まるで見せ物でも見るようにして口ぐちに喋り合う。

これが何よりつらく、悲しいことだった。休み時間など、同級生は運動場に出て皆で遊んでいても、私はひとり教室の中で過ごす癖がつき、学校とは楽しく勉強する所ではなく、大勢の笑いものにされる所という気がして、いつも下ばかり向いている毎日だった。

雪でも降れば足にボロ布を巻きつけ、母の作った藁草履わらぞうりをはき、学校まで四キロの雪を踏みしめて登校した。

学校では一メートル角ぐらいの大火鉢に、まっかな炭火がたくさん入れてあり、生徒た

ちは、われ先きに火鉢のまわりを囲み、手足を暖めた。

私だけは寒くても火にあたらぬ。凍えて真つ赤になっているやけどの跡が残った足を大勢の前に、さらして見せるのはさすがに恥ずかしく、ただ、だまって自分の机に腰をおろし、感覚の無くなった足をさすっている。しばらくすると凍えてしびれるように痛い感じが、少しずつもとに戻ってくる。

大正二年であつた。

子守り奉公

小学校三年になると、学科に書き方（毛筆）が加わった。

私は毛筆が好きで、毎週土曜日に清書を提出するために母から半紙をもらう。上級生の兄が二枚、私は一枚しかもらえない。だから書き損じは絶対にできない。もちろん練習もできない。その一枚が書きはじめの書き終わりである。たった一枚の紙へ精魂こめて書くせいか、成績はいつも甲の上であつた。

このように三年間は無事に過ぎて修業証書をいただけたが、家の手伝いなどの都合で出席日数は全体の三分の二に満たなかった。

やけどの足で恥ずかしい思いをすることがあっても、子供にとっては、学校はやはり楽しい所である。友達もできる。だが、家庭の事情で学校へ行けなくなつた。私は三年を修了すると退学。勉強好きだつた兄、定吉も尋常高等小学校一年を一学期で共に退学した。兄は農作業手伝い奉公、私は十歳にして子守り奉公にでた。その時の兄の一年間の給料は十四円、私の給料は一年間に五円であつた。

私の仕事は近くの下駄屋（半農）の長男の子守りで、主人は西牧広吉という。

その年の夏、下駄の材料を取るため、八溝山まで主人と一緒に行き、そのまま山に小屋を建てて寝起きすることになった。

主人夫婦は朝早くから山に登り、山桐とか朴の木やセンの木など、営林署から払い下げられた木を切り、それで下駄材を取るのが仕事だつた。きびしい仕事で、とうてい赤ん坊の面倒などみておれない。十歳そこそこの私が子守りをする。一日中子供を背負い、忙しい時などは乳を与える時でも、赤ん坊を背からおろしてくれない。背中で乳を与えるあわただしさだつた。おむつなどは一日三回位しか取りかえないので、私の背中はいつもびしょぬれだつた。私は着物の着替えがないので、自分の体温で乾かすよりほかに手がない。そんな時、あまりの情けなさ辛さにわざと赤ん坊をつねったり、おでこをゴツンコしたりして大声で泣かせた。